

舍利弗による給孤独長者への臨終説法

岩 田 朋 子

インドにおいて仏教の出家修行者は、身につける衣、一日の食事、活動拠点といった衣・食・住について、在家者の布施により支えられ修行生活を全うしていた。そして、布施を為していた在家信者に対して、出家修行者は説法をもって応えていた。中でも、舍利弗 (Śāriputra／Sāriputta) と在家信者である給孤独長者 (Anāthapiṇḍada／Anāthapiṇḍika) との二人は、出家修行者と在家信者との在り方を象徴するように多くの経典や律典において登場する⁽¹⁾。

例えば『根本説一切有部毘奈耶雜事』には、火葬の制定と塔の築造方法及び塔に供養された物の取り扱い規則の制定とその過程が語られ、舍利弗⁽²⁾ (舍利子) が亡くなった後に、給孤独が彼の舍利塔を建立する場面が記されている。舍利弗の従者であった人物が、舍利弗の遺体を火葬し、遺骨と衣鉢を携えて釈尊が滞在する王舎城に持ち帰った。その後、舍利弗の遺骨の管理を任された阿難が、釈尊とともに舎衛城の祇園精舎に移り、香と花でもって遺骨供養を続けていた。給孤独は舍利弗との親交を理由に遺骨供養を次のように申し出る。

給孤長者聞舍利子已入涅槃。有遺身骨具壽阿難陀親為供養。便詣其所禮
雙足已。白言。聖者知不。尊者舍利子今已涅槃。彼即是我先所尊重。長
時日夜敬仰彌深。仁將彼骨隨處供養。我亦有心欲申供養。惟願見與。…

(T24, p. 291a19-24)

給孤独長者は舍利子が既に涅槃に入ったこと、遺骨が存在し具壽阿難陀

によって供養されていることを聞き、その場所に行き〔阿難陀の〕両足に礼拝して語った。「聖者よ。ご存じでしょう。尊者舍利子は既に涅槃されましたが、あの方は私が以前より尊重していた方です。長きにわたり、日夜深く尊敬しておりました。〔今は〕あなたがあの方〔の遺骨〕をもって思うままに供養なさっております。私には供養したいという思いがあります。どうか〔遺骨を〕お与えください。」と。

この後、阿難は給孤独からの申し出があったことを釈尊に知らせる。釈尊からの許可を与えられた給孤独は、自宅で舍利弗の遺骨を供養することとなった。しかし、ある時、彼の邸宅の門が閉じていたために中に入れなかった他の人々から「福業を独り占めしている」と給孤独は非難をうけた。この出来事をきっかけに、給孤独は釈尊に塔建立を請願してそれを許可されることになる。

若佛聽者。我今欲於顯敞之處以尊者骨起窣覩波。得使衆人隨情供養。佛言長者隨意當作。(T24, p. 291c1-3)

〔給孤独は申し上げた。〕「…もし、仏がお許し下さるならば、私は顕敞な場所に尊者〔舍利子〕の遺骨でもって塔（窣覩波）を建立したいのです。人々に思い通りに供養させたいのです。」仏は「長者よ、思い通りにしなさい」と言った。

ここでは、在家信者からの申し出など然るべき時となるまで、比丘の遺骨供養を出家者側で管理していることが描写されている。そして、給孤独が建立した舍利弗の舍利塔が、他の在家信者にとっても供養することが可能な施設としての機能を期待されていたことがわかる。

以上の記述からは、舍利弗の死後⁽³⁾も給孤独が存命であるが、一方、病床の給孤独を舍利弗が見舞い、説法したとする話が阿含・ニカーヤ中に複数存在している。例えば『増一阿含經』では、舍利弗からの説法を聞いた給孤独が

程なく死に、生天した⁽⁴⁾後、天界から降下して舍利弗に散華したことが伝えられている。つまり、両伝承は相違しているのである。なぜ同一の登場人物達の間で、各々の死に際してこのような相違点が存在しているのだろうか。また、命終間際の給孤独に対して、舍利弗は何を説いているのか。これらの点について、本研究では、まず舍利弗が給孤独長者を見舞い説法したことを記すテキスト群より、伝承間に存在する相違点の背景を検討する。合わせて、舍利弗が給孤独に対して為した臨終説法について考察する。

I. 『増一阿含経』に説かれる舍利弗による給孤独長者の見舞い

重病の床にある給孤独長者（阿那那那長者）を見舞う場面は、『増一阿含経』において卷第四十九「非常品」第五十一に説かれる。ここでは、舍利弗⁽⁵⁾が天眼をもって、給孤独が重患であることを知り、阿難を随行させて見舞いに訪れることから始まる。

爾時阿那那那長者身抱重患。時舍利弗以天眼觀清淨無瑕穢。見阿那那那長者身抱重患。尋告阿難曰。汝來共至阿那那那長者所問訊。時阿難報曰。宜知是時。爾時阿難到時持鉢。入舍衛城乞食。以次漸漸至阿那那那長者家即便就座。時舍利弗即於座上。語阿那那那長者曰。汝今所疾有増有損乎覺知苦痛漸漸除不至増劇耶。長者報曰。我今所患極為少頼覺増不覺減。舍利弗報曰。… (T2, p. 819b12-21)

その時、阿那那那長者は重病を患っていた。そして、舍利弗は天眼をもって清浄に観察し〔彼には〕過ちや汚れはなかった。〔そのため、舍利弗は〕阿那那那長者が重患を抱えていることを〔天眼により〕知った。彼は、阿難に〔次のように〕尋ねた。「あなたは私とともに阿那那那長者のもとに往き、訊問しなさい。」と。時に、阿難は〔これに〕応じて「相応しい時に参りましょう」と答えた。そうして、〔出掛ける〕時間となり、阿難は鉢を持って、舍衛城に入り乞食をなしつつ、阿那那那長

者の家宅に至り、座に就いた。その時、舍利弗は〔阿難の〕上座に坐し、阿那那那長者に対して〔次のように〕語った。「いま、あなたの疾病は増しているのか悪化しているのか、〔それとも〕苦痛は徐々に除かれていることを覚知していて、〔苦痛は〕はげしさを増していないのか。」と。長者は答えた。「私がいま、患っているものはきわめて〔治病への〕期待も少なくなり、〔苦痛は〕増すばかりで減ることを感じることはありません。」と。〔これに対して〕舍利弗が答えた。…

まず、随行者の阿難が病状を問い、給孤独は苦痛が増すばかりであると答える。そして、この後、発語者が阿難から舍利弗へと代わり、舍利弗が説法を開始する。その内容は、①仏と法と僧伽（＝和合しており、戒・三昧・智慧・解脱・見慧を成就している無上の福田）に対する憶念を行えば、不堕惡趣と善趣への再生が約束されること。⁽⁶⁾②六外処（色・声・香・味・細滑・意）とそれらに依る六識（色の識～意の識）を生起させないこと。⁽⁷⁾③今世・後世と兩世の識を生起させないこと。⁽⁸⁾④愛と愛の識を生起させないこと。⁽⁹⁾また、五蘊仮和合・十二支縁起など諸法因縁を理解すべきことを説き、この教説の名を空行第一之法と説明する。これに対して、給孤独は、今まで長い間、仏や諸々の長老比丘を恭敬してきたが、舍利弗の説示したような教化は受けたことがないと感涙する。

そして説法が終わり、舍利弗と阿難が去った後、間もなく給孤独は天界（三十三天）に再生し、天界から降下して次のような偈を唱える。

舍利弗阿難去未久。須臾之頃阿那那那長者命終。便生三十三天。…時彼天子在虛空中。叉手向世尊。便説斯偈

此是祇洹界 仙人衆娛戲 法王所治處 當發歡悅心

…我是須達。又名阿那那那人所明了亦是如來弟子受聖尊教。今取命終生三十三天。世尊告曰。汝由何恩今獲此天身。天子白佛。蒙世尊之力得受天身。時阿那那那天子。復以天華散如來身上。亦散阿難及舍利弗身上。

遍遠祇洹七匠還没不現…

(T2, p. 820a15-b7)

舍利弗と阿難とが〔長者のもとを〕去って間もなく、阿那那那長者は命終した。そして三十三天に生まれた。…その時、彼の天子は虚空に在って合掌して世尊に対峙してこのような偈を説いた。

「この祇園は、仙人達を心安らかにして楽しませる。法王の治めるところは、当然歓悦の心を起こさせるものである。」〔と〕。

…私は須達または阿那那那と名付けられ、人々とはっきりと知っております。また、私は如来、弟子から聖なる尊い教えを享受しております。

〔そして〕いま命終となり三十三天に生まれました。」〔と〕。世尊は〔このように〕告げた。「あなたは、どのような恩義によって、いまこの天の身を獲たのか。」と。天子は仏に申し上げた。「〔私は〕世尊の力を蒙り、天の身を受けることを得たのです。」と。その時、阿那那那天子は天華をもって如来の身体の上方より散華した。そして、阿難および舍利弗の身体の上方からも散華して、祇園を七周右遶して〔その場から〕姿を消して現ることはなかった。…

ここからは、天子となった給孤独が、祇園に滞在している釈尊や阿難と舍利弗を散華していることがわかる。従って、給孤独の死後も舍利弗が存命であることがわかる。

つまり、『増一阿含經』においては、(A) 舍利弗と阿難による見舞い、(B) 舍利弗による説法、(C) 給孤独が見舞いの後間もなく生天(三十三天)、(D) 天子給孤独による祇園を讃える偈、(E) 釈尊・阿難・舍利弗への散華、という順序で構成されている。

さらに、これまで未聞であった説法を舍利弗より命終間際にうけたと感涙していたにも関わらず、給孤独は自分が天子となったのは、釈尊の力に依るものだと自身で告げている(天子白佛。蒙世尊之力得受天身。)。このことは他の經典には見られない特徴である。このためか、彼が釈尊の前で祇園を讃える偈の中には、命終間際の給孤独に対して、直接説法した舍利弗を讃える

内容が存在しない。

II. *Majjhima-Nikāya* に説かれる舍利弗による給孤独長者の見舞い

病床にある給孤独長者を見舞う場面は、*Majjhima-Nikāya* では第143経 *Anāthapiṇḍikovāda-sutta* に説かれる。給孤独は使者を祇園精舎へと遣わして、釈尊と舍利弗を礼拝させ、舍利弗には私宅への訪問を望んでいることを知らせる。それを告げられた後、舍利弗は以下の様にして出掛ける。

atha kho āyasmā sārīputto nivāsetvā pattacīvaram ādāya āyasmatā
ānandena pacchāsamaṇena yena anāthapiṇḍikassa gahapatiṣṣa
nivesanaṃ ten' upasaṃkami. upasaṃkamitvā paññatte āsane nisīdi.

(MN.III, p. 258.30-259.1)

そこで、尊者サーリプッタは衣を着て、鉢をもって、尊者アーナンダを随行する沙門とし、アナータピンディカ長者の私宅のそのところに近づいて行つた。近づいて行つてのち、準備されていた坐所に坐した。

ここでは、阿難を随行させている点は先の『増一阿含経』と同様であるが、在家信者である給孤独からの要請に従い、舍利弗が見舞いを承諾していることが特徴的である。

また、舍利弗が給孤独に対して苦痛の度合いを尋ねると、彼は「力士が鋭い剣先で頭を切り裂いているようだ」「力士が堅い革ひもで頭を締め付けているようだ」「屠殺者が牛に用いる小刀で腹部を切り裂いているようだ」「力士二人に腕を掴まれて焼け焦がされているようだ」という喩えで苦痛を訴えている。この直後、舍利弗は次のように説法を開始する。

①六内処（眼・耳・鼻・舌・身・意）への執着を捨てること、②六外処（色・声・香・味・触・法）への執着を捨て去ること、③六識（眼識～意識）への執着を捨て去ること、④六触（眼触～意触）への執着を捨て去ること

と、⑤六受（眼触より生じる受～意触より生じる受）への執着を捨て去ること、⑥六界（地界・水界・火界・風界・空界・識界）への執着を捨て去ること、⑦五蘊への執着を捨て去ること、⑧四無色（空無辺処～非想非非想⁽¹¹⁾処）への執着を捨て去ること、⑨現世・来世などへの執着を捨て去ること。給孤独はこの法を聞いて感涙し、今までそのような法を聞いたことがないことを述べる。さらに、自分以外の在家者にも理解可能な者が居るかもしれないことを述べ、在家者にも法を説いてくれるよう勧請する。説法が終わると、舍利弗と阿難は立ち去り、間もなく給孤独は天界（Tusita 天）に再生する。

atha kho āyasmā ca sārīputto āyasmā ca ānando anāthapiṇḍikā
gahapatiṃ iminā ovādena ovaditvā utthāy' āsanā pakkamimsu. atha
kho anāthapiṇḍiko gahapati acirapakkante āyasmante ca sārīputte
āyasmante ca ānande kāyassa bhedaṃ param maraṇā tusitaṃ kāyaṃ
upapajji. (MN.III, p. 261.28-262.2)

そこで、尊者サーリプッタと尊者アーナンダは、アナータピンディカ長者をこのような教戒によって教戒して、座から立ち上がって、〔そこから〕立ち去った。そして、アナータピンディカ長者は尊者サーリプッタと尊者アーナンダが立ち去ってから間もなく、身体が減んで死後、トゥシタ天の身に再び生まれた。

そして彼は天界から降下して、次のような偈を唱える。

idaṃ hitaṃ jetavaṇaṃ	isisaṃghanisevita
āvutthaṃ dhammarājena	pītisaṃjananaṃ mama.
kammaṃ vijjā ca dhammo ca	siḷaṃ jīvitam uttamaṃ,
etena maccā sujjhanti	na gottena dhanena vā.
ṭasmā hi paṇḍito poso	sampaṇṇaṃ atthaṃ attano
yoniso vicine dhammaṃ,	evaṃ tattha visujjhati.
sārīputtova paññāya	siḷena upasamena ca
yo hi pāragato bhikkhu	etāva paramo siyā. ⁽¹²⁾

(MN.III, p. 262.8-15)

このジェータ林こそが、仙人達が住するところである。

法の王が住するところであり、私の喜びを生み出すところである。

業と明と法そして、戒とに基づいている命は最上である。

これによって、人は清浄となる。氏姓や財産によってではない。

それゆえ、実に人は賢明な〔ものと〕なり、自己の利益を見つつ、根本から法を観察しなさい。このようにそこに集まるのである。

サーリプッタこそが、戒によって寂靜によって、了知しており、実に彼岸に赴く比丘であり、そのようなものこそが、最上〔のもの〕であろう。

この箇所には、祇園を讃えるだけでなく、命終間際の給孤独に対して説法を為した舍利弗を讃える偈が含まれている。しかし、偈の誦出の後に散華の記述（先述の『増一阿含経』におけるEの部分）を欠いているため、舍利弗と給孤独との生死に関する先後関係が不明である。

よって、*Majjhima-Nikāya*においては、(A) 舍利弗と随行者阿難による見舞い、(B) 舍利弗による説法、(C) 給孤独が見舞いの後間もなく生天（トゥシタ天）、(D) 天子給孤独による祇園と舍利弗を讃える偈、という順序で構成されている。

III. 『中阿含経』に説かれる舍利弗による給孤独長者の見舞い

重病を患い危篤の給孤独長者を見舞う場面は、『中阿含経』において巻第六「教化病経」に説かれる。給孤独は使者を祇園精舎（勝林給孤独園）に滞在していた釈尊と舍利弗（舎梨子）のもとへと往かせる。

世尊告使人曰。令長者給孤独安隱快樂。令天及人阿修羅捷塔和羅刹及餘種種身安隱快樂。(T1, p. 458c19-20)

この使者を通して給孤独の言葉を聞いた釈尊は、礼拝を受けたのち、給孤独や天・人・阿修羅などを安穩快樂にさせたいと述べる。そして、舍利弗には私宅への訪問を望んでいることも併せて知らせ、彼はそれを承諾する。

尊者舍利子過夜平旦著衣持鉢。往詣長者給孤独家。…

(T1, p. 459a4-5)

ここからは、舍利弗が一人で給孤独のもとを訪れていることがわかる。他の経典においては、給孤独を見舞う際、舍利弗は阿難を同伴して出掛ける様子が記されている。舍利弗が単独で行動をしている点は他と異なる¹⁴⁾。

そして、私宅に到着した舍利弗は、給孤独と話し始める。彼が食事が進まないことや苦痛のひどさを訴えると、舍利弗は怖れることはないと言かけ、次のように説法を始める。

長者莫怖。長者莫怖。所以者何。若愚癡凡夫成就不信。身壞命終趣至惡處生地獄中。長者今日無有不信唯有上信。長者因上信故或滅苦痛生極快樂。因上信故或得斯陀含果或阿那含果。長者本已得須陀洹。…

(T1, p. 459a12-17)

「長者よ、怖れることはない。長者よ、怖れることはない。なぜかという、愚痴の凡夫は信を持たぬこと（不信）に基づき命終すると悪処に趣き地獄に生まれるが、今日、長者は不信を持たず、すぐれた信（上信）を持っている。長者よ、すぐれた信によって苦痛を滅し快樂を生み、すぐれた信に基づき斯陀含果あるいは阿那含果を得る。長者よ、〔あなたは〕既に須陀洹果を得ている。…」

ここでは「すぐれた信（上信）」に基づく果報（斯陀含果あるいは阿那含果）を挙げている。舍利弗は、給孤独に対して①すぐれた信（上信）に基づき既に須陀洹果を獲得していると説明している。これに続いて、②善戒、③多聞、④恵施、⑤善慧、⑥正見、⑦正志、⑧正解、⑨正脱、⑩正智、という

順に十項目に関して同じ果報が繰り返し語られる。⁽¹⁵⁾

この聞法の後、給孤独の病気が治るという場面が描写される。

於是長者病即得差。平復如故。從臥起坐。歎尊者舍梨子曰。善哉善哉。
為病説法甚奇甚特。尊者舍梨子。我聞教化病法苦痛即滅生極快樂。尊者
舍梨子。我今病差平復如故。 (T1, p. 459c5-9)

こうして、長者は途端に病が癒えて、以前のように回復し、寝所より起きあがり坐して、尊者舍梨子に対して感歎して〔次のように〕語った。
「善いかな。善いかな。病のために説法する〔こと〕は非常に奇特なことです。尊者舍梨子よ、私は教化病法の〔教説〕を聞いて、苦痛が即座に消滅し、〔私には〕この上もない快樂が生じました。尊者舍梨子よ、私はいま病が癒えて、以前のように回復いたしました。」と。

その後、回復した給孤独は、釈尊と王舎城竹林園で初めて対面した出来事から祇園精舎を布施するまでの出来事を回想しつつ舍利弗に語る。そして、祇園精舎の建立時より舍利弗が度々自分を助け、現在も病気を治してくれたことを語る。給孤独は自ら世話して舍利弗を食事によって供養すると、舍利弗は再び様々な説法を行って立ち去る。

この経では、説法の後、給孤独の病気が回復するという結末となっており、天界への再生を語る他の經典とは全く異なる。従って、『中阿含経』においては、(A) 舍利弗単独による見舞い、(B) 舍利弗による説法、(C') 給孤独が治病する、という順序で構成されている。

IV. 『雑阿含経』に説かれる舍利弗による給孤独長者の見舞い

病床の給孤独を見舞うという記述は、『雑阿含経』において前述のテキスト群とは掲載の形態が異なる。釈尊による給孤独への見舞いと説法（第1030経）と阿難による見舞いと説法（第1031経）、そして、舍利弗による見舞い

と説法（第1032経）というように、三人が別々に給孤独を訪ねる様子が描写される。さらに、前に挙げたテキスト群でいうと後半部分に当たる箇所、つまり給孤独の死と生天（兜率天）と祇園及び舍利弗についての偈の讃歎（第593経）は別経として掲載されている。以下、該当箇所を挙げる。

卷第三十七卷 第1030⁽¹⁶⁾, 1031, 1032経 (T2, p. 269b, 269b-c, 269c8-270a4)

= *Samyutta-Nikāya* 55.27, 55.26 (SN.V, p. 385.12-387.14, 380.17-385.11)

卷第二十二 第593経 (T2, p. 158b24-c29) = *Samyutta-Nikāya* 2.2.10 (SN.I, p. 55.9-56.13)

【釈尊による見舞い】

第1030経では、給孤独が病気であることを聞いた釈尊は自ら彼のもとへと赴いた。⁽¹⁷⁾ 釈尊は、給孤独から苦痛の激しさを聞いて次のように説き始める。

…乃至説三受如差摩修多羅⁽¹⁸⁾広説。乃至苦受但増不損。佛告長者。当如是学。於佛不壊淨。於法僧不壊淨。聖戒成就。長者白佛。如世尊説四不壊淨。我有此法。此法中有我。世尊。我今於佛不壊淨。法僧不壊淨。聖戒成就。佛告長者。善哉善哉。即記長者得阿那含果。… (T2, p. 269b8-14)

乃至、三受を説いているのは『差摩修多羅』に広説されているようである。乃至、〔給孤独の〕苦受はただ増すのみであり、消えることはなかった。仏は長者に告げた。「まさにこのように学ぶべきである。仏において不壊淨〔を成就しており〕、法・僧において不淨法〔を成就しており〕、聖戒を成就すべきである。」「と。〕長者は仏に申し上げた。「世尊が四不壊淨を説かれるように、私はこの法を有しております。この法の中に私はおります。世尊よ、私は今、仏において不壊淨〔を成就しており〕、法・僧において不淨法〔を成就しており〕、聖戒を成就しております。」と。仏は長者に〔次のように〕告げた。「善いかな。善いかな。」と、すなわち長者が阿那含果を獲得することを授記された。…

釈尊は、四不壊淨（仏・法・僧に対する不壊淨と聖戒成就）を実践するよ

う説法する。給孤独が既にそれらを実践していると答えると、釈尊は称賛し、給孤独が阿那含果を得ることを予言する。ここで説かれる四不壊淨は、須陀洹果を得るための行為として位置づけられているが、釈尊はそれに触れず、二階位先の阿那含果、つまり出家修行者が獲得する果報を授記おり、この点の特徴である。この経は、釈尊が食事の供養を受けて立ち去る場面で終えている。

よって、第1030経においては、(A') 釈尊による見舞い、(B') 釈尊による説法という順序で構成されている。

【阿難による見舞い】

第1031経の阿難による見舞いの内容は、前の第1030経の釈尊によるものとはほぼ同様であり、説法について表現の相異はあるが、同じく四不壊淨を勧めている。

…時尊者阿難告長者言。勿恐怖。若愚癡無聞凡夫不信於佛。不信法僧。聖戒不具。故有恐怖。亦畏命終及後世苦。汝今不信已斷已知。於佛淨信具足。於法僧淨信具足。聖戒成就。長者白尊者阿難。我今何所恐怖。我始於王舍城寒林中丘塚間見世尊。即得於佛不壞淨。於法僧不壞淨。聖戒成就。自從是來。家有錢財悉與佛弟子。比丘比丘尼優婆塞優婆夷共。尊者阿難言。善哉。長者。汝自記說是須陀洹果。…

(T2, 269b20-c2)

阿難は、給孤独が既に、仏において、法・僧において淨信を具足しており、また聖戒を成就していることを示した。これを理由に、愚癡で無聞の凡夫であれば、命終や後世の苦を恐れるが、給孤独はそれを恐れる必要はないとして、四不壊淨の修習を説明している。

これを承けて、給孤独は、自分の命終にあたって恐怖していないこと、王舍城の寒林にある丘塚で釈尊に見えてから、四不壊淨を成就していることを阿難に対して答えている。また、彼はこの後、家に財貨があれば全てを仏弟

子の比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷のために使用することを表明した。この直後、阿難は給孤独が須陀洹果を獲得していると説く。

この経も第1030経と同じく、阿難が食事の供養を受けて立ち去る場面で終えている。よって、第1031経においては、(A'') 阿難による見舞い、(B'') 阿難による説法という順序で構成されている。

【舍利弗による見舞い】

続いて、第1032経では、給孤独が病気であることを聞いた舍利弗が阿難に随行を求める場面から始まる。

爾時。尊者舍利弗聞給孤独長者身遭苦患。聞已。語尊者阿難。知不。給孤独長者身遭苦患。當共往看。尊者阿難默然而許。時尊者舍利弗與尊者阿難共詣給孤独長者舍。…
(T2, p. 269c9-13)

このように、舍利弗が単独で給孤独のもとを尋ねるのではなく、阿難と二人で訪ねている点が、第1030、1031経の冒頭と異なる点である。そして、彼から苦痛が増すばかりであると病状を訴えられた後、舍利弗は次のように説法を始める。

尊者舍利弗告長者言。當如是學。不著眼。不依眼界生貪欲識。不著耳鼻舌身。意亦不著。不依意界生貪欲識。不著色。不依色界生貪欲識。不著聲香味觸法。不依法界生貪欲識。不著於地界。不依地界生貪欲識。不著於水火風空識界。不依識界生貪欲識。不著色陰。不依色陰生貪欲識。不著受想行識陰。不依識陰生貪欲識。時。給孤独長者悲歎流淚。尊者阿難告長者言。汝今怯劣耶。長者白阿難。不怯劣也。我自顧念。奉佛以來二十餘年。未聞尊者舍利弗說深妙法。如今所聞。尊者舍利弗告長者言。我亦久來未嘗為諸長者說如是法。長者白尊者舍利弗。有居家白衣。有勝信勝念勝樂。不聞深法。而生退沒。善哉。尊者舍利弗。當為居家白衣說深妙法。以哀愍故。…
(T2, 269c15-28)

尊者舍利弗は長者に告げて言った。「まさにこのように学ぶべきである。

〔私は〕眼に執着しない。貪欲の識を生む眼界に依存しない。〔私は〕耳・鼻・舌・身に執着しない。また意にも執着しない。貪欲の識を生む意界に依存しない。〔私は〕色に執着しない。貪欲の識を生む色界に依存しない。〔私は〕声・香・味・触・法に執着しない。貪欲の識を生む法界に依存しない。〔私は〕地界に執着しない。貪欲の識を生む地界に依存しない。〔私は〕水界・火界・風界・空界・識界に執着しない。貪欲の識を生む識界に依存しない。〔私は〕色陰に執着しない。貪欲の識を生む色陰に依存しない。〔私は〕受陰・想陰・行陰・識陰に執着しない。貪欲の識を生む識陰に依存しない。』と。その時、給孤独長者は悲嘆して涙を流した。尊者阿難は長者に告げて言った。「あなたは今怯え怖れているのですか。」と。長者は阿難に〔次のように〕語った。「怯え怖れているではありません。私は過去を振り返っていたのです。仏に帰依して以来二十年余りが経ちました。私は尊者舍利弗が説く、さきに聞いたような深妙なる法をいまだ聞いたことがありません。」と。尊者舍利弗は長者に告げて言った。「私はこれまで諸々の長者にこのような法を説いてこなかった。」と。長者は尊者舍利弗に〔次のように〕語った。「在家の中にも熱心な信者がおります。信にすぐれ、思念にすぐれ、樂にすぐれたものがおります。深妙なる法を聞いていないために、退没するのです。善いかな。尊者舍利弗よ、まさに在家の中の熱心な信者のために深妙なる法を説くべきであります。哀愍をもって〔そのようになさってください〕。」と。

舍利弗は、給孤独に対して以上のように四項目を修習することを説示する。その四項目とは、①六感官（眼～意）に執着すべきでないこと。②六感官の対象（色～法）に執着すべきでないこと。③六界（地・水・火・風・空・識界）へ執着すべきでないこと。④五蘊に執着すべきでないことである。これを聞いた給孤独は「仏に帰依して以来二十年あまりとなるが、このような教説は聞いたことがない」と言い、舍利弗はいまだかつて諸々の長者に向けて

説いたことはないと返答している。このように、ここで説かれた四項目は、在家信者向けの教説内容でないことがわかる。さらに、給孤独は「在家信者は深法を聞いていないから苦へと退没しているのである」といって、他の在家信者にも哀愍をもって同じ内容の説法の教示を懇願する。

この説法の内容に関しては、第1030、1031経における釈尊と阿難の説法内容と著しく異なる。⁽¹⁹⁾ 釈尊と阿難は各々、給孤独に対して四不壊淨の實踐について教示しているが、この経では触れられず、彼が獲得する果報についても舍利弗は言及していない。

この経の構成は、第1030、1031経と同じく、舍利弗が食事の供養を受けてさらなる説法を為した後、立ち去る場面で終えている。よって、第1032経においては、(A) 舍利弗と随行者阿難による見舞い、(B) 舍利弗による説法、という順序である。

さて、『雜阿含經』では、給孤独が病死した後の出来事が第593経という別經典として分けて伝えられている。冒頭箇所を以下に挙げると、

…時。給孤独長者疾病命終。生兜率天。為兜率天子。作是念。我不應久住於此。當往見世尊。
(T2, p. 158b25-26)

このように、給孤独は死後、兜率天に生まれ天子となったと記されている。続いて、彼は釈尊に会うために降下し、礼拝して以下のような偈を唱える。

於此祇桓林	仙人僧住止	諸王亦住此	增我歡喜心
深信淨戒業	智慧為勝壽	以此淨眾生	非族姓財物
大智舍利弗	正念常寂默	閑居修遠離	初建業良友

(T2, p. 158c1-8)

給孤独は、祇園（祇桓林）と舍利弗を讃える偈を誦すと、直ちにその場から姿を消してしまい、これ以上の行動はみられない。また、釈尊はこの直後に弟子達に対して同じ偈を聞かせ、天子の訪問があったことを語る。そして、

釈尊自ら舍利弗を讃える偈を以下のように説く。

一切世間智	唯除於如來	比舍利弗智	十六不及一
如舍利弗智	天人悉同等	比於如來智	十六不及一

(T2, p. 158c25-28)

この箇所においては、舍利弗自身の発言や散華の様子が見られないため、給孤独の死後も舍利弗が存命であるか否かは明確でない。但し、天子となった給孤独と釈尊との両者が、舍利弗に対する偈を唱えていることが特徴的である。

よって、第593経においては、(C') 給孤独は病死後、生天（兜率天）、(D) 天子給孤独による祇園と舍利弗を讃える偈、(F) 釈尊による舍利弗を讃える偈、という順序で構成されている。

以上のように、舍利弗による給孤独への臨終説法を取りあげ『増一阿含経』、MN、『中阿含経』、『雜阿含経』、SN についてその構造を分析した。その中、『雜阿含経』と SN のみが、給孤独長者臨終の際に舍利弗が彼を見舞った場面と、死後に天子となった給孤独が祇園精舎を訪れる場面とを別々に伝承していることが明らかとなった。この編纂形態の特異性に注目し、改めて『雜阿含経』を中心に給孤独長者以外の在家信者や出家修行者に対する臨終時の説法の事例をみていく。

V. 『雜阿含経』に説かれる臨終説法

舍利弗は、給孤独長者以外にも病床の闍陀比丘を見舞い説法をなしている。舍利弗は王舎城迦蘭陀竹園に滞在している時、那羅聚落の菴羅林中に居る闍陀が重病であることを聞いて、摩訶拘絺羅比丘と共に彼のもとを訪れる。

一時。佛住王舎城迦蘭陀竹園。時。有尊者闍陀。住那羅聚落好衣菴羅林中。疾病困篤。時。尊者舍利弗聞尊者闍陀在那羅聚落好衣菴羅林中。疾病困篤。聞已。語尊者摩訶拘絺羅。尊者知不。闍陀比丘在那羅聚落好衣

菴羅林中疾病困篤。當往共看。摩訶拘絺羅默然許之。…

(T2, p. 347b14-16)

この後、舍利弗は、闍陀から「病の苦痛をこれ以上耐えることが出来ない⁽²⁰⁾ので、刀でもって自殺をしたいと望んでいるのだ」と告白される。そこで舍利弗は「自らを傷つけてはいけない。看病する者がいないならば私が看病しよう。」⁽²¹⁾と⁽²²⁾いって闍陀を制止するが、彼は主張を繰り返すのみであった。これを受けて、舍利弗と闍陀との間で以下のような対話がなされる。

舍利弗言。我今問汝。隨意答我。闍陀。眼及眼識眼所識色。彼寧是我異我相在不。闍陀答言。不也。…復問。闍陀。耳鼻舌身意及意識意識所識法。彼寧是我異我相在不。…復問。闍陀。汝於眼眼識及色。為何所見何所識何所知故。言眼眼識及色。非我不異我不相在。…復問。闍陀。汝於耳鼻舌身意識及法。何所見何所知故。於意識及法。見非我不異我不相在。…

(T2, p. 347c8-18)

ここでは、舍利弗によって六感官（眼～意）とその対象（色～法）が執着すべきものであるか否かを順次問われており、闍陀は一つ一つについて執着すべきでない⁽²¹⁾と答える。続いて、発話者が摩訶拘絺羅比丘に代わり、正念すべきこと⁽²²⁾や八つの苦（生・老・病・死・憂・悲・苦・悩）について説かれて⁽²³⁾いる。これは、出家者修行者に対する臨終説法であるけれども、前述の『雜阿含經』第1032經において、給孤独に教示された内容と類似する。つまり、舍利弗は命終間際の在家信者給孤独に対して、出家修行者に対する説法を用いたといえる。

また、上記以外にも、『雜阿含經』には釈尊が命終間際の在家信者に対して説法をなした事例がある。そこでは、釈尊は達磨提離長者に対して、四不壊淨と六念（念仏・念法・念僧・念戒・念施・念天）の修習について説き、阿那含果の獲得を授記している。また別の事例では、長寿童子に対して、四不壊淨と六明分想（一切行無常想・無常苦想・苦無我想・觀食想・一切世間不可樂想・死想）の修習について説き、斯陀含果の獲得を授記している。さ

らに、釈氏沙羅に対して、四不壊浄と五喜処の修習について説き、阿那含果の獲得を授記している。

このように『雑阿含経』において、給孤独長者以外の在家信者は、四不壊浄と一項目づつの説示を受けるが、舍利弗による給孤独への説示内容は四不壊浄と四項目（六感官・六感官の対象・六界・五蘊への不執着）である。また、『雑阿含経』第1032経において、舍利弗は在家信者に対して説いたことがない内容をはじめて給孤独に示したとも告げている。このことを鑑みると、在家信者の中でも給孤独が特異な存在として捉えられていたといえる。

結 び

以上、舍利弗が臨終の給孤独長者を見舞う記述を取りあげ、その構造に注目し、二人の生死の先後関係に関する矛盾と説法内容について検討した。

はじめに触れたように『根本説一切有部毘奈耶雜事』では、給孤独は舍利弗が死亡した際に存命とされる。一方、『増一阿含経』では病死し天となった給孤独が降下し、舍利弗に散華する記述から、給孤独は舍利弗より前に死亡していたとされる。『増一阿含経』と同様に、MN・『中阿含経』・SN・『雑阿含経』各々の構造を分析すると、給孤独の死後に舍利弗が存命であることを明確に記すのは『増一阿含経』のみであるとわかる。

あるいは『中阿含経』のように病氣治癒の伝承が存在し、『根本説一切有部毘奈耶雜事』のように「給孤独が舍利弗の舍利塔を建立した」という記述が存在する背景には、同じ説一切有部所属である『雑阿含経』の構造が関係するものと考えられる。

この『雑阿含経』には、給孤独以外の在家信者に対する臨終説法も数多く語られるが、いずれも見舞いと説法のみで構成されている。給孤独の事例は、一連の在家信者への臨終説法の中に位置づけられており、説法を受けた者のその後の展開が記されるのは給孤独のみである。従って、『雑阿含経』に説かれるように、「舍利弗による見舞いと説法」、「給孤独の病死と生天」、この

二つのテーマが別個に伝承された可能性を指摘できる。

註

- (1) 祇園精舎の建立時に、舍利弗が現地に派遣される監督役の比丘として登場する。『十誦律』(T23, p. 244b19-b26), 『摩訶僧祇律』(T22, p. 415b29-c9), 『五分律』(T22, p. 167a10-16), 『根本説一切有部律』(Gnoli. pp. 17.29-18.25.) (Dutt. pp. 143.11-144.8.) (P. 189a7-b7 ; D. 198a4-198b4)
- (2) 『根本説一切有部毘奈耶雜事』卷第十八 (T24, p. 286c09-292a19)
- (3) 舍利弗入滅と釈尊入滅との関連については、(岩井昌悟「舍利弗の入滅をめぐる諸傳承について」『印度学仏教学研究』54-1.)がある。
- (4) AN には給孤独も含めて21人の在家信者が、在家のまま阿羅漢果を得たとされている (AN.III, pp. 450-451)。藤田宏達氏は、ここに名前の挙げられた21人の内、一人として、不死を現証した後出家したとも、阿羅漢果を得たとも明記されていないと指摘する (『在家阿羅漢論』『結城教授頌寿記念 仏教思想史論集』大蔵出版, 1964, pp. 63-64)。
- (5) T2, p. 819b11-820c2.
- (6) 舍利弗報曰。如今長者當憶佛。是謂如來至真等正覺明行成為善逝世間解無上士道法御天人師號佛衆祐。亦當追憶念法。如來法者。極為甚深可尊可貴無與等者。賢聖之所修行。亦當念僧。如來衆者上下和順無有諍訟法法成就。聖衆者戒成就三昧成就智慧成就解脫成就見慧成就。所謂僧者四雙八輩。此名如來聖衆可尊可貴。是世間無上福田。長者。若修行念佛念法念比丘僧者。其德不可稱計。獲甘露滅盡之處。若善男子善女人念三尊已佛法聖衆。墮三惡趣者終無此事。若彼善男子善女人修念三尊。必至善處天上人中。(T2, p. 819b21-c4)
- (7) 然後長者。不起於色亦不依色而起於識。不起於聲不依聲而起於識。不起香不依香而起於識。不起於味不依味而起於識。不起細滑不依細滑而起於識。不起意不依意而起於識。(T2, p. 819c5-9)
- (8) 不起今世後世。不依今世後世而起於識。(T2, p. 819c9-10)
- (9) 不起於愛莫依愛而起於識。(T2, p. 819c10-11)
- (10) 所以然者。緣愛有受。緣受有有。緣有有生起愁憂苦惱。不可稱計。是謂有此五苦盛陰。無有我人壽命士夫萌兆有形之類。若眼起時亦不知來處。若眼滅時則滅。亦不知去處。無有而眼生。已有而眼滅。皆由合會諸法因緣。所謂因緣法者。緣是有是有無是則無。所謂無明緣行。行緣識。識緣名色。名色緣六入。六入緣更樂。更樂緣痛。痛緣受。受緣受。受緣有。有緣生。生緣死。死緣愁憂苦惱不可稱計。耳鼻舌身意亦復如是。無有而生已有而滅。亦復不知來處。亦不知去處皆由合會諸法因緣。是謂長者。名為空行第一之法。(T2, p. 819c11-23)

- (11) MN.III, p. 259.12-261.14.
- (12) SN. I, p. 55.12-19に同一の偈がある。
- (13) T1, p. 458b28-461b16.
- (14) 後述の『雜阿含經』第1030, 1031經では、釈尊と阿難とがそれぞれ単独で給孤独の見舞いに出掛けている。しかし、この經以外では、給孤独を見舞う舍利弗は必ず阿難を随行している。
- (15) T1, p. 459a17-b5。また、本經の最後には、これらを教示して帰還した舍利弗を釈尊が称赞する場面がある。(是時世尊無量大衆前後圍繞而為説法。世尊遙見尊者舍利子來告諸比丘。舍利子比丘聰慧速慧捷慧利慧廣慧深慧出要慧明達慧辯才慧。舍利子比丘成就實慧。所以者何。我所略説四種須陀洹。舍利子比丘為長者給孤独十種廣説來。[T1, p. 460b8-13])
- (16) 本經に相当する箇所は、SNにみられない。
- (17) 爾時給孤独長者得病身極苦痛。世尊聞已。晨朝著衣持鉢。入舍衛城乞食。次第乞食至給孤独長者舍。… (T2, p. 269b2-4)
- (18) この「差摩迦修多羅」は、同じ『雜阿含經』において、「又摩修多羅」あるいは「差摩迦修多羅」、「又摩比丘修多羅」とも記され、他の在家信者に対する臨終説法の場面でも言及される。(T2, p. 269b20; c12, p. 270a21; b21)
- (19) 第1032經のSN該当箇所においては、舍利弗が給孤独に対して、四不壞淨と八正道及び正智、正解脫について説いている(SN.V, p. 381.23-384.12)。彼が獲得している果報についても預流果(sotāpatti)とされている。
- (20) 尊者闍陀言。我今身病。極患苦痛。難可堪忍。所起之病。但増無損。唯欲執刀自殺。不樂苦活.. (T2, p. 347b27-28)
- (21) 時尊者摩訶拘絺羅。語尊者闍陀。汝今當於大師修習正念。如所説句。有所依者則為動搖。動搖者有所趣向。趣向者為不休息。不休息者則隨趣往來。隨趣往來者則有未來生死。有未來生死故有未來出沒。有未來出沒故則有生老病死憂悲苦惱。如是純一苦聚集。如所説句無所依者則不動搖。不動搖者得無趣向。無趣向者則有止息。有止息故則不隨趣往來。不隨趣往來。則無未來出沒。無未來出沒者則無生老病死憂悲苦惱。如是純大苦聚滅。… (T2, p. 347c23-348a5)
- (22) T2, p. 270a7-16。本經には「達磨提離長者修多羅亦如世尊為給孤独長者初修多羅廣説。第二修多羅亦如是説…」とあり、第1030經を前提にしていることがわかる。他、婆藪長者(T2, p. 270b15-18)、耶輸長者(T2, p. 270c12-13)について、達磨提離長者と同内容である。
- (23) T2, p. 270a18-b13.
- (24) T2, p. 270b20-c10.

キーワード 舍利弗 給孤独長者 臨終説法 雜阿含經 四不壞淨